

1.

イメージ先行ではなく、名実ともに『癒しの島』として世界に欠かせない場所になる  
観光支援情報のよりスムーズな提供  
物品のお土産のみならず、一生の思い出という財産をお土産に

2.

素直な誇りを持ち、明るい未来像を描く  
岡山県：「晴れの国おかやま」←県民の連帯意識や誇りを高めるフレーズ

3.

沖縄こそが時代の最先端であるという認識を、沖縄県内で広げる  
合理主義・能率第一主義などを先頭にした「発展観」からの脱却

4.

子どもも大人もすべての存在に、共に地域の未来を作る権利  
子ども達の選挙参加プロジェクトにより、県民全体の政治参加意欲向上

5.

電車は絶対に必要：渋滞なく、快適な移動を最低限保証する  
国際通りの排気ガス対策：散策やカフェタイムを楽しめる環境を整備  
自転車と徒歩を再認識、あるこうプロジェクト

6.

アジアとの連携、日本の豪雪地帯などとの交流、高齢者層を中心とした避寒滞在  
歴史的に強い絆があるアジアとの交流の再活性化・青年の船沖縄版など  
市民農園の増設

7.

「沖縄 21 世紀ビジョン」を、感動とともにアピール  
心に残る歌、舞台公演などを展開

8.

ブータンの国民総幸福量（GNH）なども参考に、沖縄ならではの将来像を提示  
ユニセフ調査結果：オランダの子どもは幸福度が高い、親と週二回以上一緒に夕食が 90%  
しあわせとは？人間とは？生きる目的とは？・・・沖縄からの哲学を発信

## 2030年 私が創るおきなわ

大石 薫



『 旅する人、よろこぶ、おきなわ。』

暮らす人、もっとよろこぶ、おきなわ。 』

2030年には、こんなキャッチフレーズも全国的に定着し、沖縄は、単なる観光地から、実際に生活する人々の日常生活の快適さ・便利さ・高い安心感や、地域社会の団結度などに、世界的な注目が集まる場所となっている。

生活環境の充実には、子どもたちの環境整備が欠かせず、その土台は親の環境整備にある。利益のみ追求するのではなく、福利厚生・給与体系や労働環境・条件の根本的な見直し等、自治体・民間が一体となって、県民の生活向上のために努力している。

ワークシェアリングなどの形式を活用し、週三日程度の出勤での正社員待遇保障、在宅勤務の拡大、男女問わない育児休暇の拡充など、柔軟な労働形態や生き方・働き方の選択肢がさらに広がっている。

独自のアイデアを用いて沖縄発で起業し、世界を相手に挑戦する人々もますます増えている。イキイキと働き、人生を満喫する魅力的な大人が身近に増えたことで、子ども達も精神的に安定し未来への希望を健全に持てる。

ビーチクリーンや周辺のゴミ拾いを通じた、マナー教育が広がり、ビーチや市街地の清潔度が世界的に有数の状態になる。美しく、心安らぐ島として、高いスピリチュアル性が、現在のバリ島以上に評価される。バリ島では自然や美観のために建物の高層化が制限されており、そうした点を沖縄も参考にして、美観保護や、本来の持ち味を生かした開発を大事にしている。

本島や離島にも電車が走り、県民の生活の利便性・経済性が格段に改善されている。渋滞や排気ガスと無縁の電車生活は、通勤・通学に欠かせない。美しい海を眺めながら進む電車の旅は、旅行客にも大好評で、のんびりと駅弁に舌鼓を打ちながらの道中に、お年寄りも喜んでいる。

各地の駅で販売される駅弁は、沖縄特産品を活用したもので、沖縄だけでなく、日本中の駅弁祭りでも売り切れ続出になるほどだ。

米軍基地も世界的な政策転換によって縮小の一途をたどり、今ではごく一部に残るのみとなっている。基地内の学校・病院・スーパーなどの設備も開放され、身近なアメリカ体験として改めて人気となる。県内で留学できるため、他県の学生も大勢進学している。世界平和や友好のシンボルの場所として、若者たちの新しい交流や絆を生み出している。

アジアとの連携もますます活発だ。那覇国際空港は、アジア各国からの直行便が発着し、さらに賑わいを見せている。国際セミナーや芸術公演も随時開催され、それらの参加目的で訪れる人も増える。

ガーデニング、緑化政策も推奨され、色鮮やかな花々が島全体を飾っている。ブーゲンビリアなどが一年中至るところに咲いており、街全体の雰囲気もさらに明るくなった。赤瓦とブーゲンビリアは、沖縄に映える印象的な色彩だ。

2030年のおきなわ。

そこには、輝く姿が見える。沖縄が持つ本来の素晴らしさを世界に向け発信し、今現在の問題点は、少しずつ改善してゆこう。

もっともっと、新しい沖縄が見える！

注：こちらは、公募委員応募に「2030年私が創るおきなわ」という題名での小論文提出があり、そのために書いたものです。他委員の皆様にも読んでいただければと思い、資料として提出いたします。

資料 3.

## ブータンと国民総幸福量 (GNH) に関する東京シンポジウム 2005

10月5日(水曜日)、外務省は日本ブータン友好協会との共催により、公開シンポジウム「ブータンと国民総幸福量 (GNH) に関する東京シンポジウム 2005」を東京において開催した。

### (1) カルマ・ゲレ ブータン総合研究所上級研究員

幸福は、人の奥深いところにある願望であり、究極目標でもある。また、まわりが不幸であれば人は幸福になることができず、社会全体の幸福を追求していく必要がある。幸福の追求のため、1972年、ワンチュク国王就任直後に GNH の概念が生まれた。

ブータンの開発は 1960 年代から進み、1972 年までに 2 つの 5 年計画実施を通じて、先進国の経験・モデル等を研究した。その結果、経済発展は、南北対立、貧困問題、環境破壊、文化喪失につながり、必ずしも幸せに直結しないことが明らかになった。そこで、人の幸せを追求する GNH という概念を導入し、1) 経済成長と開発、2) 文化遺産の保護と伝統文化の継承・振興、3) 豊かな自然環境の保全と持続可能な利用、4) よき統治の 4 つを柱として開発を進めることとした。

1) 経済成長と開発：ブータンの 1 人あたり GDP は 834 ドルと南アジアでモルディブに次いで 2 番目であり、また平均寿命も過去の 46 歳から 66 歳まで飛躍的に延びた。バランスのとれた開発を心がけるべく、人々に平等にアクセスを提供すると共に、累進課税による所得再配分を実施している。

2) 文化遺産の保護と振興：文化・価値観は学校で十分に教えており、また大家族制のネットワークにより、ブータンにはホームレスがない。

3) 環境の保存と持続可能な利用：農民は環境に依存して生活しており、また河川下流のバングラデシュ、インド等のことも考慮して、勝手に環境を変えることなく、緑化、生物多様性保護を進めていくことが重要。ブータンの国土の 26% が自然保存地区であり、また 72% は森林地区。

4) よき統治：様々な国民参加型政治の導入を検討しており、1998 年、国王は閣僚や国民議会に大幅な権限委譲を行う、大臣会議メンバーの国民議会における選挙の実施を決定。

枝広がるエダヒロの視点(枝廣淳子)

## 「幸せ」を測る経済指標「GPI」が意味するもの (07/08/29)

枝廣淳子(えだひろ・じゅんこ)

環境ジャーナリスト・翻訳家。東大大学院教育心理学専攻。通訳者を経て講演、執筆、環境 NGO「JFS」設立など精力的に活動。主著に『地球のなおし方』『なぜあの人の解決策はいつもうまくいくのか?』など。訳書に『不都合な真実』など多数。

私たちは経済や社会の進歩を測る指標として、よく「GDP(国内総生産)」を使います。「GDPが上がった」と言っては喜び、「GDP成長率が十分ではない」と言っては、何らかの手を打とうとします。でも、ほんとうにGDPは伸びれば伸びるほどよいものなのでしょうか? GDPは、私たちの幸せの進歩を教えてくれるものなのでしょうか?

### ■GDP は幸せを測れない

GDPは、何であってもお金が動けば増えます。GDPは、人間の幸福に役立つ・役立たないに関わらず、あらゆる経済活動(モノの生産や流通)を合計するものだからです。何のためにお金が動いたかは不問です。ですから、交通事故が起これば起これるほど、環境破壊が進めば進むほど、家庭内暴力が起これば起これるほど、GDPは増えるとも言えます。

たとえば、ばい煙からぜん息にかかった人の医療費や凶悪事件に投入される警官の超過手当なども、「国の経済成長」の一端として合計されるからです。ですから「GDPが増えた」といって喜んではいけません。増えたのは喜ぶべきGDPなのか、そうではないのかを区別しなくてはならないのです。

もうひとつ、「GDPにカウントされていないけど、幸せをつくり出している」という活動もあります。たとえば、家事や育児です。お父さんやお母さんが子どもに絵本を読んであげる——これは素晴らしい幸せをつくり出していますよね。でも、お金は一銭も動きませんから、GDPは増えません。ボランティア活動も同じです。どんなに汗を流して山に木を植えたり、町の清掃をしたり、ほかのどんなボランティア活動をしても、お金が動かないかぎり、GDPには影響を与えないのです。

「GDPには、幸せを壊すものも入っている一方、幸せにつながるものが入っていない」としたら、本当の意味で、社会の進歩を測る指標とはなり得ません。GDPは、単に経済の中で動くお金の量を測っているにすぎないのです。

## ■進歩を測る GPI とは何か

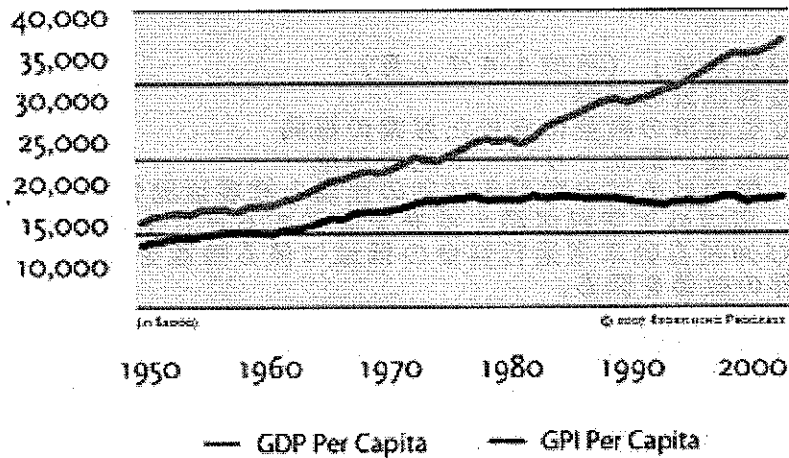
では本当の進歩を測るには、どうしたらよいのか？——世界的な経済学者であるハーマン・デイリー氏は、ISEW (Index of sustainable economic welfare) という指標を提唱しています。また、Redefining Progress (文字どおり訳すと、「進歩を再定義する」) という団体が、GPI (Genuine Progress Indicator) という指標の取り組みを進めています。

ここでは、GDPを指標とすることは地球のためにも人々のためにもならないとして、GPI (真の進歩指標) という指標を開発しました。日本や米国をはじめ、世界 10 数カ国でGPIが計算されています。

「進歩」や「幸せ」のような抽象的なものを数字として捕らえることなどできるのでしょうか？ GPIを計算するには、GDPの個人消費データをベースとしますが、「所得増加の効果は豊かな人より貧しい人のほうが大きい」という経済理論と常識に基づき、貧しい人への所得分配が増えればGPIも増えるといった調整をします。

そして、家庭やボランティア活動など、現在のGDPには入っていないが、幸せをつくり出している活動の経済的貢献を、だれかを雇ってその仕事をした場合のコスト計算をベースに計算し、足します。逆に、犯罪や公害、資源枯渇、家庭崩壊など、幸せや進歩につながっていない活動に伴って動いたお金や、健康や環境への被害額を計算して、引きます。こうした調整を加え、数値ベースでの計算を試みているのです。

日本でも米国でも、ある時期(1960~70年代)までは、人口一人当たりのGDPもGPIも、並行して伸びています。ところが、そのあとは、GDPのほうはほぼ右肩上がりに増えていくのに、GPIのほうは増えなくなったり、減ったりしている場合もあります。つまりGDPはどんどん増えているけど、私たちの幸せは増えていない、場合によっては減っているかもしれないのです(実感にあうと思う人もいないのでしょうか?)。そうだとしたら、GDPを追い求めるような経済政策や国づくりをしていいのでしょうか？



米国の1人あたりGDPとGPIの変化の遷移。近年GPIはGDPから  
 かい離している(Redefining Progress のレポートより)

でもいまだに、新聞を見ても閣僚の話も聞いても、「GDPの成長をめざす」「成長しないとだめだ」といっています。ちなみに、3%成長が24年続くと、2倍の大きさになります。必要な人的資本、生産資本、金融資本、自然資本などを考えても、24年後に日本経済が現在の倍になるということは、おそらく考えられないでしょう？ でも、目先のことしか見ていない(もしくは目先しか見ざるを得ない)人たちは、いまだに「最低でも3%成長」とかけ声を掛け、短期的な投資をする、という社会経済になってしまっているのです。

このようなGDP至上主義に対して、ユニークで本質的なアプローチをしている国があります。今回はその国の考え方をご紹介しましょう。

## ブータンの「GNH(国民総幸福度)」に学ぶ発展の哲学 (07/09/12)

環境を考えると、経済成長と本当の意味での幸せとの関連について捉え直す必要があるのではないのでしょうか。前回、GDP(国内総生産)に対する概念として、社会の進歩を測る「GPI(Genuine Progress Indicator)」という指標についてご紹介しました。今回は、CSR(企業の社会的責任)にQoL(生活の質)も含めて考えようという動きなどから近年注目を集めているブータンの「GNH」についてご紹介しましょう。GNHとは、Gross National Happinessのこと。GNP(国民総生産)ならぬ「国民総幸福度」ですね。

## ■GNHという開発哲学

国の力や進歩を「生産」ではなく「幸福」で測ろうというこの「GNH」の考え方は、1976年の第5回非同盟諸国会議の折、ブータンのワンチュク国王(当時21歳)の「GNHはGNPよりもより大切である」との発言に端を発しているといわれています。物質的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさも同時に進歩させていくことが大事、との考えです。

ワンチュク国王は、どのようにしてこのユニークな概念を打ち出されたのでしょうか？ 1960年代～70年代初め、ブータンでは先進国の経験やモデルを研究しました。その結果、「経済発展は南北対立や貧困問題、環境破壊、文化の喪失につながり、必ずしも幸せにつながるとは限らない」という結論に達したそうです。そこで、GNP増大政策をとらずに、人々の幸せの増大を求めるGNHという考えを打ち出しました。「開発はあくまで、国民を中心としておこなわれるべき」——GNHとは、ブータンの開発哲学であり、開発の最終的な目標なのです。

このGNHという概念のもと、ブータンでは、1)経済成長と開発、2)文化遺産の保護と伝統文化の継承・振興、3)豊かな自然環境の保全と持続可能な利用、4)よき統治——の4つを柱として開発を進めることになりました。

もともとは、幸福という概念は主観的なものですし、国際的に一律の尺度で測れるようなものではないため、GNHはあくまでも概念的なものとして考えられていました。しかし、GNHという考え方が知られるようになり、「GNPのように、指標として数値化できないか」という声が高まったこともあって、1999年にブータン研究センターが設立され、具体的な研究がスタートしています。

現在、まずはあくまでもブータン国内で通用する指標をめざして、幸福という概念を9つの要素に分けて検討しているそうです。その9つの要素とは、

- ◎ living standard(基本的な生活)
- ◎ cultural diversity(文化の多様性)
- ◎ emotional well being(感情の豊かさ)
- ◎ health(健康)
- ◎ education(教育)



- ◎ time use(時間の使い方)
- ◎ eco-system(自然環境)
- ◎ community vitality(コミュニティの活力)
- ◎ good governance(良い統治)

だそうです(順不同)。

人々の情緒がどのくらい豊かか、人々がどのように時間を使っているか、地域社会はどのくらいイキイキしているか——こういったことは、GDPにはほとんど影響を与えないでしょう(いえ、逆に、GDPの世界で、お金を稼ぐ仕事以外に、地域社会のために自分の時間を使ったりボランティアで環境を守る活動をしたりすることは、その本人は満足であってもGDPの足を引っばる「不経済」な行動だと見なされてしまうでしょう! )。

#### ■途上国でも森林保護を優先

でも、「本当の意味での国の進歩を測るのはどちらなのだろう?」と思いませんか? 自分の子どもや孫が大きくなるころ、あなたは「日本のGDPが増えてよかった」と思うでしょうか、それとも「日本のGNHが増えてよかった」と思うでしょうか?

ブータンは、国民1人当たりのGDPは低い発展途上国です。でも、GNHという指標を掲げて自然保護を優先的課題として取り組んできた結果、ブータンの国土の26%は自然保存地区で、72%は森林地区になっています。そして同時に、経済的には豊かでなくても、ホームレスや物ごいのいない社会を実現しているそうです。ブータンでは「あなたは幸せですか?」という質問に対して、国民の90%を超える人が「幸せ」と答えたそうです(日本だったら、何%の人が「幸せ」と答えるでしょう?)。

「お金や物質的な成長を追い求めることは、本当に幸福のために役立つのか? 逆に、損なっていることはないか?」——ブータンのGNHの考え方は、私たちに「本当の目的」の問い直しを投げかけています。